

アイロニー発話と推論的コミュニケーション

Ironical Utterances and Inferential Communication

吉村あき子
Akiko Yoshimura

奈良女子大学
Nara Women's University
akikoy@cc.nara-wu.ac.jp

概要

ヒトのコミュニケーションに現れるアイロニー発話は、コードの解読だけでは話者の意味を解釈することができず、推論が大きな役割を果たしている典型的な事例です。本発表では、アイロニー発話の認知処理プロセスを観察し、話者の意味は何かを追求することを通してその特徴的解釈パターンを抽出し、推論に基づくコミュニケーションの進化との関係を考察します。

キーワード: コミュニケーション, アイロニー発話, 認知語用論, 推論, アブダクション, 推意

1. はじめに

これはよく知られている Grice の例ですが、例えば、[A がこれまで親友だと思っていた X が、A の秘密を商売敵に漏らしてしまった。A と聞き手 B の両者がこのことを知っている状況]で、A が B に「X はいい友達だね」と言うとアイロニーです。この時この発話は「X はひどい友達だ」を意味するとされています。古典的理論では、アイロニー発話は、発話内容の反対を意味するもの(意味論レベルで字義的意味に取って代わる)として分析されますが、Grice は、それを語用論的に引き出された推意であると分析します[1]。しかし Grice の説明では、発話の字義的意味からその反対を意味する推意にどのように移行するのが明示されていませんし、アイロニー発話の推意が、他の一般的な推意と同じタイプとみなせるのかどうかははっきりしない、ということが Sperber and Wilson によって指摘されています[2]。

一方 Wilson は、アイロニー発話を、話者以外に帰属する思考に対して、話者が乖離的態度を表明するものだ、という独自の定義を提案しています。これは多様なアイロニー発話に適用できる説明範囲の広い定義なのですが、アイロニー発話によって伝達されるもののステータスについては何も述べていません[3]。

本発表は、アイロニー発話の認知処理プロセスを考察し、アイロニー発話によって伝達されるのは(発話の字義的意味の反対の場合も含め)、Grice の言うように主として推意であり、それは、コミュニケーションにおけることば(発話)の役割は、聞き手の推論を正しい

軌道に乗せることである、という Sperber and Wilson の見解を支持すること、アイロニー発話の存在は、ヒトのコミュニケーションが推論に基づくことを強く支持するものであることを示したいと思います。

2. 発話の表意と推意

発話によって伝達される意味に、明示的意味(explicature, 表意)と非明示的意味(implicature, 推意)があることはよく知られています。Wilson は表意を「解読と推論の組み合わせで同定される伝達される命題」と、推意を「発話によって伝達される意味で表意ではないもの」と規定しています[4]。しかし、表意形成過程は、かなり明確になっていますが、推意導出については、まだよく分からないところがあります。

語用論はコミュニケーションにおける推論を扱い、推論を研究する学問は論理学なので、語用論は論理学を避けて通ることができません。一般に、推意の分析をするときには、導出過程が分かりやすい演繹の削除規則を使ったものが例としてよく引き合いに出されます。例えば、A に「ベンツは運転する？」と聞かれて B が「高級車には乗らないの」と答えた場合に、B の発話が「ベンツは運転しない」を推意として伝達するような場合です。このように発話内容「高級車は運転しない」と文脈想定「ベンツは高級車だ」を前提にして演繹推論し、結論「ベンツは運転しない」を引き出すのが一般的です。演繹規則では、前提が真であれば帰結も必ず真になりますので、前提の発話内容に矛盾するような帰結は引き出されません。これが、先ほどの Grice のアイロニーの説明に、Sperber and Wilson が疑問を呈した理由だと思われます。「X はいい友達だ」という発話を前提にして「X はひどい友達だ」という推意をどうやって引き出すのか、万が一引き出せたとして、それは上記ベンツの例と同じ推意なのか、という疑問です。

もし、推意導出に演繹規則しか貢献できないのであれば、当該発話から「X はひどい友人だ」を推意として引き出すのは不可能です。しかし、ほかの推論規則も

推意導出に貢献するのであれば、説明の可能性は出てきます。そして、私たちが日常の様々な状況で実際に行っている推論は、演繹規則に限らないので可能性はあるといえます。吉村(2016)はそれを調べ、ほかの推論規則も推意導出に貢献することを示し、推論規則に基づく分析的推意と拡張的推意の2分法を提案しました。

3. アブダクションによる推意 (吉村 2016)

伝統的な論理学は演繹と帰納を扱いますが、ほとんど命題を単位とする演繹が中心です。この伝統論理学でヒトの行う推論を十分説明することはできないので、パースは、「ひらめき」のような科学的仮説形成の推論をも扱えるよう、演繹 deduction・帰納 induction・アブダクション abduction の3分類を提唱しています[5]。

推意との関連で言うと、吉村(2016)は、帰納(一般化/抽象化)もアブダクションも推意導出に貢献していること、命題単位の入力を扱う推論規則だけでは、推意は説明できないことを明らかにしています[6]。

アブダクションとは「驚くべき事実Cが観察される、しかしもしHが真であれば、Cは当然の事柄であろう、よって、Hが真であると考えべき理由がある」と定式化される推論です。例えば「[陸地のずっと内側で、魚の化石のようなものが発見される]という驚くべき事実(C)が観察される。しかしもし[この一帯の陸地はかつて海であった](H)が真であれば、Cは当然の事柄であろう。よって[この一帯の陸地はかつて海であった](H)と考えるべき理由がある、というような推論です[7]。

次の文脈における母親の発話は、アブダクションによって推意が引き出されていると考えられます。[米西部開拓時代のシルバーレイクで、会社の要請でインガルス一家だけが厳しい冬を現地で越していた。まだ極寒の2月、西部に向かう気の早い入植者の荒くれ男達が宿を求めてきた。3人の娘がいるので断りたかったが、凍えさせるわけにいかず、引き受ける。娘のローラが次のように述べる。]「そんなわけで母さんは、5人もの知りもしない人たちのために、夕食をしたくしました。…食事のあと片づけがまだ終わりもしていないのに、かあさんは洗い桶の前をはなれて、小声でゆっくりいいました。It's bedtime, girls. 「寝る時間ですよ、みんな。」まだ寝る時間ではなかったのですが、かあさんが、知らない男たちと一緒に階下にはいけませんよ、ということをやそれとなくいったのだということが、みんなにはちゃんとわかりました。」(吉村 2016: 212)

この「寝る時間ですよ」という母親の発話は、真偽でいうと偽です。しかし推意が引き出されています。その導出過程は、まだ寝る時間ではないのに「寝る時間ですよ」とかあさんが言う(驚くべき事実 C)が観察される。しかし「知らない男たちと一緒に階下にはいけない」ということを伝えたい(H)とすれば、C「寝る時間だ」と言って、娘たちを2階に行かせようとするのは当然の事柄であろう。よってHが真であると考えべき理由がある、というアブダクションで推意Hが創りだされていると考えるのが妥当だと思われるのです。

アイロニー発話における推意導出とは異なる点もいくつかありますが、本発表では、このアブダクションによってアイロニー発話の推意導出を説明する可能性を考えたいと思います。

4. 推論に基づくコミュニケーション

「Xはいい友達だよ」というアイロニー発話によって伝達される「親友だと思っていたのに裏切るなんて、Xはなんてひどいやつなんだ」(筆者の解釈)は、発話の論理形式を発展させたものではないので、推意だとみなさざるを得ません。アイロニー発話の話者の意味は、字義的意味にではなくその推意にあります。つまりは、アイロニー発話の役割は、まさに Sperber and Wilson のいう、聞き手の推論を正しい軌道に乗せること、といえるのではないのでしょうか。発話内容とその背景文脈との大きなギャップが、アブダクションを駆動すると考えられます。アイロニー発話の存在は、ヒトのコミュニケーションの原型が、コードの解読に基づくものではなく、推論に基づくものであることを強く支持するといえるかもしれません。

文献

- [1] Grice, Paul (1989) *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge.
- [2] Sperber, Dan and Deirdre. Wilson (1981) "Irony and the Use – Mention Distinction," in Cole, Peter. ed. *Radical Pragmatics*, 295-318, Academic Press.
- [3] Wilson, Deirdre (2009) "Irony and Metarepresentation," *UCL Working Papers in Linguistics* 21: 183-226.
- [4] Wilson, Deirdre(2016) "Relevance Theory," *Oxford Handbooks Online*, DOI: 10.1093/oxfordhb/9780199697960.013.25.
- [5] Buchler, Justus (1955) *Philosophical Writings of Peirce*, Dover Publications, New York.
- [6] 吉村あき子 (2016) 「演繹される推意と創作される推意」 *JELS* 33, 209-215, 日本英語学会.
- [7] 米盛裕二 (2007)『アブダクション—仮説と発見の論理—』勁草書房, 東京.